

酒と水

「水」から「日本酒」を見直す

「水の言葉辞典」著者
松井健一



「酒」に関わる「水」

筆者は五〇年間、繊維の加工技術開発・製造技術開発・工場長、コンクリート系建材の研究所長・工場長、その他分野の技術開発を担当してきた。どの問題も共通して「水」が深く関係していた。

平成初期には数年間、神戸の灘、伊豆の大山で「日本酒」の製造技術に深く関わったことがある。初めて案内された蔵とそこで受けた説明の情景は、昨日のことのように鮮明に目に浮かぶ。

日本酒の造りによって、水の質はきわめて重要で、日本には良質の水があるから日本酒が発達した。このことは一般常識レベルで知っていた。その後、多くの書物から知ったのだが、水道が普及した今でも、微量な鉄やマンガンは嫌われる。製品の着色原因になるからで、酒造工程で使われる装置、配管や製品を入れる容器を洗う用水の質にも気を遣うという。

ところが、水は純粋であればいいというものでもない。例えば塩素は酵母の増殖には必要な養分の一つだという。筆者

の知らない問題が無数にあるようだ。考えてみると、「造り」の時の水だけではない。できあがった酒の中の水、飲んだ後の胃の中の水、体内で消化されてからの水……。興味は果てしなく続く。

酵母の大きさに身を縮めて

蔵に案内されて最初に受けた説明は、筆者にはすべてが新鮮で、不思議な内容だった。

通常の「モノ造りの世界」は、技術や科学により、文字や絵で説明できる場合

「水の言葉辞典」の構成

四季を通して、豊富な水に恵まれている日本には、水に関わる言葉の数はきわめて多い。その表現も豊かで、使われる分野も広い。紆余曲折を経て、まず分野を水、陸水、海水、気象、環境、産業、生活、文化、名称の九つに大別した。これらは通常の本の「章」に相当する。

その下に、それぞれを三つ、多くて八つ、合わせて四〇〇の「節」に相当する項目を設けた。水、水蒸気、氷、河川、地

が多い。ところが、「酒造りの世界」はそのような単純な世界ではなさそうだ。「水の科学」を学んできた筆者には、短期間で理解できそうもない、と思いつつも、自分に適した入り口を探そうとした。「酒の主成分は水だ」「水分子は酒の魅力を出している」という視点は自分勝手に、あらかじめ用意していたが、「神秘的な世界」への入口は程遠い。

ところが説明で、酵母の体長は七ミクロン程度だと教わり、そこで閃いた。自分がその大きさに身を縮めれば酵母になる。そうすれば、小さな世界での「水の働き」が見えてくるかもしれない。

サラサラ流れる水は、酵母からみればドロドロ、ネバネバしている。簡単に動き回れない。それでも、時間はゆっくり流れる世界だ。蔵の部屋に浮かんでいても怖くない。真空でない限り、重力を感じない世界だろう。

酵母になったつもりで各工程を診て回った。蔵のどこでどこに無言でじっと立ち止まって蔵の中を想像したのであ

る。その時の蔵人たちの目には、奇妙なよそ者に映ったであろうが、見て見ぬ振りをしてくれたことに感謝している。酒の味わいや利き方については、蔵の近くにある居酒屋で詳しい指導を受けた。その時の筆者のアタマは、酵母のままだった。この一連の体験から得た知見は、その後の「水の科学」を極めるうえで大いに役立っている。

この成果の一部は当時、本紙にも掲載させていたたいしている。

「水」を追いかけて

手元に集まる数多くの「水情報」から「水に関わる言葉」を抜き出しながら整理を始めた。三十数年かけた結果をこの7月、丸善から「水の言葉辞典」として世に出した。紙数の制約もあったが、絞り込んだ言葉は六、五〇〇になった。

本辞典では「科学で証明されていない理論(?)」や「似非科学」と思われる言葉は避けた。特に、商売優先とおぼしき宣伝用の言葉は排除した。

五十音順に納められている。このような項目だけを抜き出したリストを「目次」として巻頭に、そしてその各項目を「項目索引」として巻末に付けた。

同じ言葉が複数の異なる場面で用いられることもある。例えば「水切り」は四

つの「項目」、すなわち台所、水遊び、華道、茶道に重複して現れる。そしてこの辞典の最後には、収録したすべての「言葉」を分野を超えて、五十音順に並べた総索引を付けた。

「水の言葉辞典」への期待

通常の辞典は、五十音順に並べられた「言葉」見出し語にそれぞれ解説が記されていない。知らない用語については入口がない。ところが、本書は「項目索引」から関連する用語を探し出すことができる。また、ある用語にたどり着いたら、その頁の周辺に、それまでに気がつかなかった言葉に触れることができる。自分なりの新語を創るキッカケが得られるかもしれない。

地球上の「水が局在化してきたこと」「水の自然浄化が追いつかないこと」などの情報が目立ってきた。「生活、健康」といった身の回りの変化や「環境の変化」を感じ始めて久しい。その実態を具体的に知り、原因を解析し、そして、各人の立場で対応策を講じなければならぬ。

また同時に、「水を愛しむ」ことなども併せて、「水まわり」を整理するうえでこの『水の言葉辞典』が一助となれば幸甚である。

から主として酒に関わる「用語」見出し語の一部を抜き出して以下に並べた。

収録した酒関連用語

『水の言葉辞典』に、どのような言葉が収載され、どのような解説をしているかを紹介させていただく。「項目索引」

◆ 開加
開加(あか) ①仏教語で、仏前に供

える水のこと。阿伽とも書く。開伽の水ともいわれるが、この場合の開伽は供物を指す。開伽は梵語(ぼんご)アルガ、あるいはアルギアからの言葉で、功德水(くんとくすい)と訳されている。②その水を入れる器。開伽杯(あかちき)開伽器ともいう。③僧侶の梵語(梵語)から、酒の意。

◆酒
温(あたた)め酒 暖め酒とも書く。①燗(かん)をして温めた酒のこと。「ぬくめさけ」に同じ。燗酒ともいう。陰曆9月9日以降の式事の酒は温めて用いられた。②身を温めるために飲む酒。↓水 関連季語・秋。

◆雨
雨風食置(あめかぜしき) 雨風は、菓子類と酒類の両方の意。菓子、飯、うどん、酒など、なんでも置いている食置。

酒涙雨(さいるいう) ①陰曆7月7日、七夕の日に降る雨。②織女と牽牛(けんぎゅう)が一日だけ許された逢い引きの別れに流す涙。③雨で会えなかった哀しみの涙ともいわれる。↓七夕雨、涙の雨、涙雨(なみりゅう)。

◆飲
飲み口が外れる 酒樽などの下についてた詮が外れるという意。転じて、小便が漏れること。

●松井健一氏の略歴 1935年岐阜県生まれ。東京都在住。54年灘高校卒。58年東京工業大学(化学工学課程)卒。60年東京工業大学院理工学研究科修士課程(化学工学専攻)修了。

同年、旭化成工業(現・旭化成)入社。合繊および建材の研究所長・工場長、旭化成建材常務取締役を歴任後、旭化成のシシタック部門・(株)旭リサーチセンターの専務取締役として旭化成が

飲み込み顔 理解し納得した顔付きという意味で、何もかも心得ているような顔。

◆酒
温(あたた)め酒 暖め酒とも書く。①燗(かん)をして温めた酒のこと。「ぬくめさけ」に同じ。燗酒ともいう。陰曆9月9日以降の式事の酒は温めて用いられた。②身を温めるために飲む酒。↓水 関連季語・秋。

霰酒(あられさけ) あられ餅を焼酎につけて乾燥し、これを数回繰り返したのち、みりんに漬けて密封して熟成させた酒。奈良の特産。みぞれ酒ともいう。

伊勢清めの酒 陰曆9月17日(現代は10月17日)に行われる神嘗祭が終わった翌日に降る雨。あとを清める雨の意。神嘗祭は宮中の行事で、天皇がその年の新穀で造った御饌(みけ)と神酒を伊勢神宮に奉納する祭り。

飲酒(おんじゅ) 「おんじゅ」とも読む。①酒を飲むこと。飲酒(いんじゅ)に同じ。②飲酒戒(おんじゅかい)の略。

ループの技術管理を担当。97年独立して水環境科学研究所を設立し、同所の代表。所長。現在に至る。(株)旭リサーチセンター顧問。水のサイエンスをベースに幅広い分野で研究に取り組み、全国各地で講演。著作活動を続けている。

著書に「水の不思議(Ⅰ、Ⅱ)(日刊工業新聞社)」、「水の言葉辞典(丸善)」、共著として「水の百科辞典(丸善)」、「水の総合辞典(丸善)」などがある。

させる。「連敗していた相手に打ち勝つて」。対義「溜飲(りゅうこん)が下がる」。

◆霞(かすみ)
霞(かすみ) ①空気に浮遊するごく小さな水滴・ちりなどのために、遠くのものに同じ。②飲酒戒(おんじゅかい)の略。

飲酒戒(おんじゅかい) 仏教語で、五戒の一つ。酒を飲んではならないという戒め。不飲酒戒ともいう。

間水(けんすい) ①一日二食であった時代に、朝食と夕食との間にとる間食のこと。現在の昼食に当たる。②三食のほかは飲食すること。また、その飯、餅、酒など。③酒の別称。酒を含めた飲食をいう僧侶言葉。玄水とも書く。

酒が酒を飲む 酒の酔いが回るにしたりがって飲む量はますます増えるという意。酒飲みが理性を失って大酒を飲むこと。

治養酒(じようしゅ) 春の社日(じつ)にち(に)飲む酒。社日とは雑節の一つで、春分と秋分にもっとも近い戊(つち)のえの日のこと。この日に酒を飲むと耳の遠いのが治るといふ俗信がある。酒の種類は特定されていない。↓水関連季語・春。

中酒(ちゅうしゅ) ①酒に中(あた)る意から、酒を飲みすぎて体調・気分がよくないこと。②食事しながら飲む酒。③(茶道)会席に出す二献目の酒。亭主が酌をして廻る。

はつきり見えなくなる現象。↓霧。②そのため、山腹などに樹状の薄雲のように見えるもの。通帯、春に見えるものをいう。「うがたなびく」。↓水関連季語・春。③「霧み」とも書き、視力が衰えて、酒の意になることから出た。

霞酒(みぞれさけ) 麴(こうじ)が糞のように浮かんでいる酒。↓霞(あられ)酒。

歴茶(やちや) 昔の盗人、香具師言葉で、茶屋の逆語。①茶屋。②料理屋。③特殊飲食店。

◆宗教
般若湯(はんにゃとう) 禅僧の隠語で、酒のこと。般若とは梵語で智慧・慧のこと。なんとか理屈をつけて戒律を酒り抜けていた。

大乗水 大乗仏教の悟りの境地に浸ることができるといふ意から、酒のこと。◆響えなど

濃漿(こんす) 濃水(こみず)が音変化した語。①米を煮た汁。おもゆ。②粟やもち米などで醸造した酢。早酢(はやず)。

酒池肉林(しゅちにくりん) 史記の「酒を以て池となし、肉を懸けて林となす」から、酒と肉をふんだんに用いたという、贅沢を極めた豪華な酒宴のこと。股(いん)の紉王(しゅうおう)が催した酒宴をたとえた言葉。「この世(ちまた)には、遊郭、娯楽場、飲食店などの立ち並ぶ歓楽街のよう」。

めば心が豊になり、逆に酒を飲めない人(下)には蔵が建たない」といったこと。

◆動物名
水鳥(すいちよう) ①水禽(すいき)ん類。「みずとり」とも読む。②字が水すなわち「さんすい」と鳥すなわち「西」からなることから、酒の意。

◆水(みず)
水芙蓉(みずふよう) 芙蓉は、中国では、もともと蓮の花のこと。水の中に咲くものを水芙蓉、木に咲くものを木芙蓉と呼んでいた。日本では、蓮を芙蓉と呼ぶ習慣がないので、芙蓉といえは木芙蓉を指す。朝のうちは純白、午後には淡い紅色、夕方から夜にかけては、酒を飲んだかのような紅色になる。夕方には萎む一日花。この変化から酔芙蓉ともいわれる。

水をこいて酒を得る 希望したものより、はるかによいものを得ることたとえ。類似の言葉に「漿(じょう)をこいて酒を得る」がある。

◆流
お流れ ①予定していたことが中止されること。②雨で遠足がなくなる。③酒席で目上の人から杯を受け、これについても酒。「を頂く」。④目上の人から、使い古しの品などをいただく。おさがり。おすべり。

酒のこと。水酉は「酒」を文字大分解した